

審査の結果の要旨

氏名 鄭 一 止

本論文は、日本におけるエコミュージアム運動について、小規模な地域遺産を組み合わせることによって意義のある地域理解を深める手法のひとつとみなし、その際に学習活動を起点に場所の記憶を構造化していくプロセスに着目し、そのプロセスを詳細に明らかにすることによってエコミュージアム運動の特質を抽出することを目的としている。

論文は序章と第1部、第2部、そして結章から成っている。

序章は、本論文で対象とするエコミュージアム運動の枠組みおよびこれを分析する際の方法論を論じている。加えて、用語の定義、既往研究のレビューを行い、本論文の構成を明らかにしている。

論文の本体部分は、エコミュージアム運動の展開の実相を論じる第1部（第1章から第3章）と、事例研究を論じる第2部（第4章から第6章）、および結章とから成っている。

第1部第1章は、欧米におけるエコミュージアム運動の展開過程を振り返り、博物館学における社会学的アプローチのほか、建築学などにおける美的アプローチや経済地理学などにおける政治学的アプローチに分類することが可能であり、これらが融合しつつ1970年代に新しい博物館学のひとつとしてエコミュージアムが提唱された過程を明らかにしている。

第1部第2章は、日本における戦後のエコミュージアムの展開過程を明らかにすることを目的としている。198カ所のエコミュージアム導入地域を概観し、博物館学を中心とした展開とまちづくりを軸とした展開があることを示し、とりわけ2000年代から本格化している場所の記憶を手がかりとしたまちづくりの展開とそこにおいてエコミュージアムが果たす役割について論じている。加えて、欧米でのエコミュージアム運動との比較検討を行っている。

第1部第3章は、エコミュージアム運動の基本的な要素である学習活動とそれに伴う場所の記憶に関して、調べる・伝える・共有するという各相における学習の特質と事例を取り上げ、それをもとに場所の記憶を空間的・時間的・複層的な記憶に分類しつつ、全体を概観している。

第2部序では、エコミュージアム運動を協議会型・博物館型・支援型・独立型・連携型の5タイプに分類し、その中核である博物館型。支援型・独立型の3タイプを主として分析することの正当性を論じ、各タイプの代表例としてそれぞれ、萩・朝日町・館山の事例を取り上げることを根拠を示している。

第 2 部第 4 章では、多様な住民の組織化によって学習活動を分野ごとに多層的に展開している「萩まちじゅう博物館」について詳細に分析し、記憶の構造化の段階を明らかにしている。

第 2 部第 5 章では、住民ひとりひとりが学芸員であるという形でエコミュージアム運動を展開している山形県朝日町の事例を対象にして、本論文でローカル・キュレーターと呼ぶ構造化された個人の記憶の保持者の存在の意義を論じている。

第 2 部第 6 章では、戦争遺跡を活かした「館山・地域まるごと博物館」に関して論じている。ここでは、第二世代ローカル・キュレーターと呼ばれる活動の展開が次世代にまで及んでいることを明らかにし、エコミュージアム運動の発展型のありかたを示唆している。

結章においては、各章で得られた知見を明らかにすると共に、総合的考察として、学習活動を基点とした分野ごと・地区ごと・出来事ごとのグルーピングが場所の記憶の構造化の初期段階におこなわれること、その後、それぞれのグループを超えたつながり、いわゆる場所の記憶の複合化が起き、その段階で、場所の記憶の複合を企画するローカル・キュレーターが生まれてくること、そのローカル・キュレーターが世代を超えて引き継がれることにエコミュージアム運動の次なる発展の可能性を論じている

以上、本論文は日本におけるエコミュージアム運動の全貌を明らかにし、運動を通して場所の記憶が構造化されていくプロセスを跡づけることに成功している。このことによってエコミュージアム運動の意義が明白となり、豊かな地域づくりへとつながる運動の位置づけが論理的に示されたといえる。このことは日本のエコミュージアム運動および地域づくり運動の双方にとって有用な成果といえる。

よって本論文は博士(工学)の学位請求論文として合格と認められる。